

サケ稚魚推計100万匹以上

白老のNPO調査

【白老】自然保護に取り組む町内のNPO法人ウヨロ環境トラスト(齋藤春生理事長、50人)が、町中央部を流れるウヨロ川で初めて行ったサケの生態調査で、少なくとも100万匹を超える稚魚が自然産卵で誕生していることを突き止めた。サケは重要魚種として人工ふ化による資源管理が行われ、自然産卵の様子を見られる場所が限られているだけに、貴重な環境学習の場として注目されている。(佐藤元治)

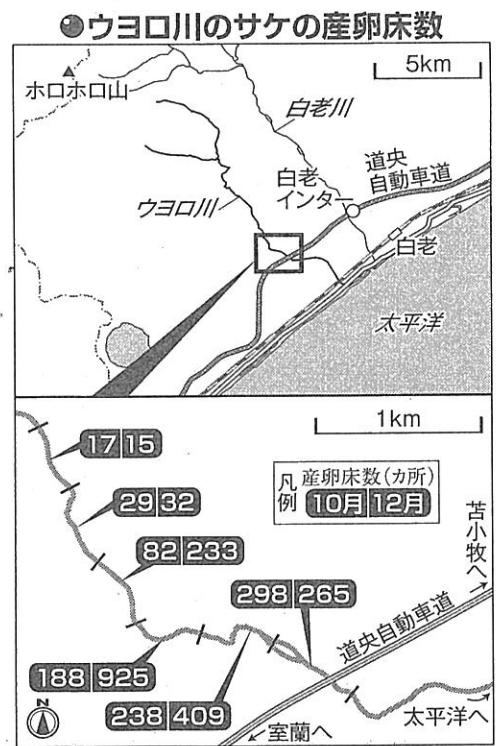


密集してウヨロ川をさかのぼるサケ (ウヨロ環境トラスト提供)

特報 プラス

ウヨロ川 自然産卵の宝庫

「環境学習の場」



生態調査は、環境教長3名(河口から5.7km)を50区間に分け、サケが卵を産み付けた場所(産卵床)を、自然産卵について、昨年10月と12月の各3日間、中流域の延べ産卵床は10

月が852カ所、12月は1879カ所。10月は下流側に、12月は中間域に集中していた。稚魚数は、札幌市豊平川さけ科学館などがまとめた試算結果を参考に推定した。豊平川の場合、産卵床1カ所当たりの稚魚は約2100匹。これをウヨロ川の12月に当てはめると約400万匹となる。卵のうち他の動物の餌になるなど、生存率はさらに下がる可能性があるが、島田代表は「厳しく見積もっても100万匹は超える」という。

ウヨロ環境トラストは、白老に残る里山を守ろうと01年、ウヨロ川流域の放置されたカラマツの人工林2・2haを取得したのが始まり。森づくりとともに川沿いの散策路も整備し、自然とのふれあいの場を提供してきた。サケ調査の目的は、地域の生態系の中でのサケの位置づけを明らかにすること。死骸調査では、鳥獣類に食われた跡も散見された。辻昌秀常務理事は「豊かな海の栄養分を、陸に持ち帰る役割も果たしている」と話す。



ウヨロ環境トラストが白老町内で開いた報告会で、調査結果を発表する自然ウォッチングセンターの島田代表(3月20日)

道内の川に戻るサケの大半が、人工ふ化用として捕獲されている。ウヨロ川も例外ではない。胆振管内さけ増殖事業協会(白老)が河口近くに捕獲場を設置。稚魚700万匹前後を毎年放流している。自然産卵するのは、大雨などの増水時に運良く仕掛けを乗り越えたサケだ。サケの研究は人工ふ化にかかわるものが中心で、自然産卵を扱うデータは限られているが、同様にサケがのぼる植別川(根室管内羅臼、標津両町境)の場合、産卵床は444カ所(2007年)。豊平川の685カ所(04年)と比べても、ウヨロ川が突出しているのは間違いない。

今回の実態調査では、サケの死骸も数えられた。10月は974匹、12月は1675匹で、ほぼ産卵床数と比例していた。地球温暖化による気候変動が問題となる中、資源管理のための人工ふ化が、サケの生命力を弱める恐れも指摘されている。札幌市豊平川さけ科学館の岡本康寿館長は「人工ふ化ばかりだと、比較的弱い稚魚が自然淘汰されにくい。自然産卵の増加は将来の資源確保につながる」と強調する。

ウヨロ川を舞台に環境を学ぶエコツアーは年間千人程度が訪れている。川は、自然と人間の付き合い方を学ぶ、格好の教材も提供していると言えそうだ。

ウヨロ川 流路延長18.8km。すべて白老町内を流れる2級河川。伊達市大滝区との町境に位置するホ

口ホロ山(1322m)、胆振管内最高峰)の山麓の温泉を源流に、河口部で白老川と合流し、太平洋へ注ぐ。